

## 〇先生を語る

村島義彦

(一)

「先輩、お伺いしたいことが一つあります。他でもありません、恩師の〇先生についてなのですが、どうしても確かめたくて、先輩のお力を拝借したいのです」

「これはまた改まって、どうした風の吹き回しかな」

「先輩もご存じのように、このたび、先生のまとめられた論文・随想・講演の数々をプライベートに整理してまとめる機会に恵まれたのですが、さて、改めて通読してみると、見えなかったものも見えてきて、思わぬ学びを素直に喜ぶとともに、他方しかし、以前からの密かな抱懐事項も同時に浮上してきて、これの真偽を確かめないでは済まなくなつたからなのです」

「それはまた深刻な……。果たして、ご期待に添えるかな」

「まず、わたしの抱懐事項の何であるかを、包み隠さずに口にしましょう。以前も今も、先生の論述に触れて一様に心に刻み込まれるのは、思想界・教育界に大きく聳える偉人たち——たとえばエラスムス、アーノルド、ゲーテ、モア、エリオットなど——の「人と思想」を論じるにあたり、先生はおしなべて、そうした偉人たちに、自らを語るより、むしろ、ご自身が、当の偉人たちに託して、自らを語っている。ように見受けられる点なのです」

「なるほど」

「ざっと目を通すだけでも明らかのように、ここに挙げられた個々の人物について語られる中身は、先生以外の教育学者たちが、同じ人物を扱って語る中身と、その迫力、説得力、精彩の点で、まるで別人物が語られているのではないかと訝られるまでに異なっているのですから」

「もつともだ」

「ならば、描き出された人物にみなぎる精彩とリアリティは、そもそもどこから生まれてくるのでしょうか。まともな読者なら、思わず知らず、こう眩かざるを得ないでしょう」

「そうだろうな」

「あまりの差に触れて、そうした読者はさらに、こうも眩くのではないでしょう。これは果たして、当の人物の客観的な描き出しなのだろうか、どちらかというともむしろ、先生の主観的な思いの投影体に近いのではないかと、とです」

「なるほど」

「エラスムスにせよ、アーノルドにせよ、ゲーテにせよ、あくまでも忠実に個々の作品に依拠して描き出される「人と思想」は、おしなべて、先生ご自身の「人と思想」の投影に近い印象を強く漂わせているのですから、しかも、豊富に引用されるセリフ自体が、まさしく先生の、地のセリフと化しているのですから、これでは、現に目にしている中身が

果たして、当の人物のものなのか、それとも、先生のものなのかと戸惑われても、あながち不思議はありませんまい」

「よく分かる」

「こうした事態に接して、ふと思ひ浮かんだのは、宴席での辛口のアドバイスとして有名な「人、酒を呑む。酒、酒を呑む。酒、人を呑む」でありました。およそ酒に目のない人士なら、ここでのアドバイスのわけでも後半部は、ズキリと心に痛みを走らせるにちがいありません。それはともかく、ここでの「人」「酒」「呑む」をそれぞれ、「人↓先生」「酒↓当の人物」「呑む↓語る」に置き換えてみると、いささか耳に痛い「酒と人」をめぐるところとした経験則は、当の人物と先生をめぐるところ（印象の上での）関係則に、ものの見事に変形するのではないでしようか」

「と言うと」

「この場合、「人、酒を呑む。酒、酒を呑む。酒、人を呑む」は「先生、当の人物を語る。当の人物、当の人物を語る。当の人物、先生を語る」となるからです」

「要するに、当の人物を語るために先生はいる」というよりは、そもそもその関係を逆転して、先生を語るために当の人物はいるとあえて修正した方が、当の人物の「人と思想」を扱った先生の著作へのコメントとしてはいっそう妥当だろう、と主張したいわけだね」

「ええ、当の人物と先生がスキなく一体化し、むしろ「当の人物、先生を語る」とまでコメントされてよい程の事態に接すると、わたしなら、ずとも、密かにこうグチりたくもなってきました。これならむしろ、先生が、わざわざ当の人物を語られるよりは、ご自身をそのまま直かに語られた方がはるかにベターなのは・・・とです」

「何も当の人物に託して、自らを語る、必要もあるまいに・・・というわけか」

「このモヤモヤした胸の焦りに、どうか、しかるべき終止符を打ってください。先生とのお付き合いの長さは、先輩の場合、わたしの数倍に及ぶのですから」

「ズバリと切り込んできたね。もつとも、テーマとしては面白く、秋の夜長を楽しむには格好の「付だし」かもしれない。差し入れの「越の寒梅」もあることだし、可愛い後輩のためだ、及ばぬながらも一肌脱ぐとしようか」

「感謝します」

## (二)

「実を言うと、このわたしの中にも、かなりの期間に及んで、そうした焦りがなかったわけではない。もつとも今は、解釈の角度が微妙にズレて、そもそもその焦りも、もはや焦りではなくなっているのだが、そのあたりの事情を、やや詳しく紹介してみよう」

「何よりの御馳走です」

「まず、ここで「解釈上の角度のズレ」と表現した具体的中身なのが、これは要するに、プラトンが芸術一般を査定する際に用いた角度そのものに思いが至って、これを取り込む中で生まれた解釈上の変化を意味している」

「と言いますと」

「プラトンの有名な「詩人追放論」は知っているね」

「もちろんです」

「プラトン自身は、およそ芸術に対して、あまりに厳しい、等級査定を敢行しすぎた、と世の批判を浴びているけれども、その際に立脚したそもその基盤は、他でもない、自らのイデア論であった」

「ええ、かれの声に耳を傾けるなら、数ある世の存在の中で真に『存在』の名に値するのは、ただアイデアのみであって、その他はすべて、このアイデアの真実在をオリジナル（原型）に仰いだ単なるコピー（写し）にすぎないことになります」

「要するに、この世の存在（『自然界の実物』）は、それ自体がまさにアイデアのコピーであるのだから、存在論的には、あくまでも『実在から遠ざかること第二番目』と位置づけられざるを得ないのだが、これに対して、世の芸術作品はどうか」

「もちろん、そうした作品はおしなべて、自然界の実物をモデルに仰いで、これを写す方向でつまりは形造られるのですから、アイデアのコピー（『自然界の実物』）のコピーとして、存在論的には、あくまでも『実在から遠ざかること第三番目』と位置づけられることになります」

「要するに、アイデアのダブル・コピーにすぎないというのが、プラトンによる芸術一般への査定であった。いささか厳しすぎる気がしないでもないがね」

「同感です」

「この点はしばらく措くとして、ともあれ今、ここにおける「アイデア」「自然物」「芸術作品」の三者関係を、先にみた「着想されたアイデア」「当の人物」「先生」の三者関係に重ね合わせるなら、そこに、どうした絵模様が浮かび上がってくるだろうか」

「と言いますと」

「まず、後者の関係図を改めて示すと、これ自体は、当の人物―エラスムスやゲーテなどが、それに触れてわが魂を衝かれ、これを世に問うべく作品化したそもそのアイデア（理念）、こうしたアイデアを具象化した当の人物たちの作品、これら作品を介して改めて当の人物（心の内部）を浮かび上がらせる研究者の仕事、という風に描き示されるにちが

いない。そうではないかね」

「仰せの通りです」

「この場合、いささか事を単純化するなら、ここでの「アイデア」は、先の「アイデア」に相当して、『実在そのもの』と、そして、こうしたアイデアを具体的な作品という形でコピーする「当の人物」は、先の「自然物」に相当して一応は『実在から遠ざかること第二番目』と、さらに、そうした人物が世に問わんとするメッセージを当の作品から読み解く「先生」は、先の「芸術作品」に相当してやはり『実在から遠ざかること第三番目』と、それぞれ位置づけられるにちがいない。いうならばこれが、わたし自身のかつての理解図であった」

「なるほど」

「それが今では、「当の人物」と「先生」の関係に、「自然物」と「芸術作品」における関係の修正版が影響して、双方の位置づけ自体が大きく移動してしまった」

「どういう意味でしょうか」

「いいかい、おおよそ「自然物」にせよ「芸術作品」にせよ、プラトンに従うなら、これ自体が『真の実在』というわけではなく、あくまでもコピーとして『二次存在』のレベルに甘んじるほかはないのだが、ただ「自然物」の場合は、純然たる二次存在であるのに対して、「芸術作品」はしかし、こうした自然物をコピーして成り立つ関係上、まさしく副次的な二次存在に留まるほかはない、と頭から決めつけられていたけれども、こうした位置づけは、果たして、何らの問題もなく是認されるのだろうか・・・」

「正直なところ、かなりの疑義が寄せられるにちがいません。あまたの実例に照らしても明らかのように、すぐれた芸術作品は、たとえ自然物を描いても、当のオリジナル以上に『本物らしい』出来栄をみせ

る場合が少なくないのですから」

「そのような場合、当の芸術作品は、直接に描き出された自然物に勝つて、そもそものイデアの原型をいつそう的確に映し出して、それゆえ、元のイデアからの存在論的な距離は、いうならば「自然物」∨「芸術作品」という形に、明らかに逆転されているにちがいない」

「ええ、純然たる二次存在」として（自然物ならぬ）芸術作品が、しかも、副次的な二次存在」として（芸術作品ならぬ）自然物が、それぞれ配置されてしかるべきでしょう」

(三)

「こうした事例を背景とした「自然物」と「芸術作品」の新たな位置づけを、今、「当の人物」と「先生」の関係図にそのまま重ね合わせると、どうなるか・・・」

「ええ」

「おそらくは、こうなるはずだ。各々の魂を介して触れたイデアに差はないとして、これを描き伝える作品が、一方は「当の人物」の著作そのもので、他方は「先生」のそうした著作に関する論考であるとするならば、双方の差は、あくまでも様式——著作自体か著作の論考か——の差でしかなく、元々のイデアとの距離を基準に測られる存在論的な差ではないのだから、場合によっては、後者のリアリティが、前者以上の精彩を放つ可能性も十分に考えられることになる」

「なるほど」

「であるなら、先生の論考に関わって、先に漏らされた「これは果たして当の人物の客観的な描き出しなのだろうか、どちらかというともむしろ、先生の主観的な思いの投影体に近いのではないか」という訝りは、セン

四

スの面であくまでも正しく、しかしながら、表現の面で誤解を招かないわけでもない、と折衷的に評価されてよいだろう」

「なるほど、先生の論考は「当の人物の客観的な——つまりは淡々とした——描き出し」とも、さらには「主観的な思いの投影体に近い」とも評するのは不適切で、いつそう適切には、「そもそものイデアの直接の写し出し」と評されてしかるべきなのですから」

「かくして、以上を大胆に整理すると、「(イデアのコピーとしての)自然物・(イデアのコピーとしての)芸術作品」(フマニタスのイデアの体現としての)教育史上の偉人たち・(フマニタスのイデアの体現としての)先生」という比例式が、おそらくは成り立つにちがいない」

「お見事の一言に尽きます」

「いささか余談になるが、東京都知事を務める石原慎太郎が、かつて、弟である裕次郎の「役者としての力量」を疑問視して、この点へのコメントを、広く世に「役者狂」の異名をもつ勝新太郎に求めたことがあった・・・」

「雑誌名は忘れましたが、確か、石原裕次郎特集号ではなかったでしょうか」

「お固いだけでなく、世の雑学にも長じているようだね。その特集号によると、「わが弟は銀幕のスターではあっても、役者としてはどうなのか。どんな役を演じて、作中人物というよりは、裕次郎本人の顔が常に覗いているのだから・・・」という兄の呟きに対して、勝自身は、いみじくもこう答えていた、「お兄さん、それは違うよ。裕次郎の凄じところはね、どんな役を演じて、どこまでも裕次郎であることなんだ。これは、役者が未熟とかどうかの問題じゃない。当人の無類の存在感がつまりは役を凌いでいるからで、同じ役者として、何とも羨ましい限りなんだな」とね」

「そうでしたね」

「このセリフは、他でもない、役者狂の勝当人から漏れ出たものだけに、一考に値する点が少なくない。ここに紹介された銀幕での裕次郎像——つまりは、役を食う当人——への穿った解釈に学んで、今、こうした裕次郎評の基本線を、あえて先生評に当てはめてみると・・・」

「うん」

「先のセリフは、思うに、こう修正されるにちがいない。「先生は、どんな著作をコメントされても、その作品は、いわゆるコメントよりはオリジナルに近くなるけれども、このこと自体はしかし、コメントライターとしての未熟を意味しないで、逆に、当人の凄さをわけても証している。要するに、当人のコメントのリアリティが、オリジナルのそれを凌いで、これ自体がまさに、オリジナルに他ならないのだから。同じコメントに携わる人間として、これにまさる羨ましさはまずあるまい」という具合にだ」

「勝新太郎のコメントが「穿っている」と評されるなら、こうした先生評も、同じく「穿っている」と評されて、もちろん不遜ではないはずだ」

#### (四)

「ところで、先生という人物の本体をおのずと浮かび上がらせる、取っ置きの手掛かりが一つばかりあるのだが、さて、これも披露したものでしょうか・・・」

「いじわるは勘弁ください」

「おそらくは君も耳にしているだろうが、先生に身近に接した連中が虚心に漏らす先生評は、おしなべて、「このようにゲートを彷彿させる研究

者には、今では、ほとんどお目にかかることがない。研究者の大半は、自らの専門分野でのみ通用する狭い範囲のエキスパートにひたすら自足しているのだから」といった中身に近いと思われる」

「その点への異論は、よほどの、ひねくれ者でもないかぎり、まずは提出されないでしょう」

「こうした大方の先生評に対して、先生はしかし、「わたしはむしろ、その本質においてゲートよりはシラーに近いようだ」と呟かれる。これを耳にした者は、ある種の驚きを禁じ得ないはずだ」

「それはそうです。思い当たらぬ節がなかったわけではないものの、シラーに自らをなぞらえる呟きは、改めて耳にすると、やはり、意外の感を拭い切れません。ならば、先生という人物をめぐる他者の弁と、当人の弁のこうした齟齬は、どうした形に調整されたらよいのでしょうか」

「調整そのものは、おそらく、当人の弁に立脚しつつ、先生の奥に棲むのは、内なるシラーである前提した上で、こうしたシラーをしかし、あくまでも「シラー」のままに解き放つ、直接の道を潔しとせず、むしろ、ゲートに向けて昇華する、間接の道を選び取って、これ自体に、自らの持てるすべてを投入して歩み進むところに、他者の弁にもある「ゲートを彷彿させる研究者」のイメージが先生の上に刻印された、と解するいわば動的な折衷案であるだろう」

「流石です」

「これ自体は、それほど不味い折衷案とも思われぬ。内なるシラーを告白したのが当人の弁で、外なるゲートに目を注いだのが他者の弁だとすれば、表面上のこうした齟齬は、むしろ、他でもない先生の人となり、何にも増して如実に浮かび上がらせていると判断されてよいからだ」

「先生の行住坐臥から発される、およそ誰にも真似のできない巨人的な

迫力も、とどのつまりは、ここから読み解かれてしかるべきかもしれない  
せん」

「なるほど「巨人的な迫力」か。先生を、まさしく、先生」たらしめて  
いるこの迫力をめぐっては、改めて思い出されることがある」

「それは・・・」

「かつて、先生から頂戴したアドバイスの言葉なのだが、六十に近い年  
齢から、おのずと管理部門に廻る機会も少なくない昨今のわたしに、先  
生は、会食の席上、こう語られた、「人さまの上に立つからには、ともあ  
れ」理」を尽くすのは当然として、これだけではなおも不十分で、加え  
て「情」も尽くしてもらいたい。とはいえ、これでも不十分な場合が出  
てくるだろう。その時には、あえて「畏」に訴える気概をためらっては  
ならない。「畏」という重しを欠いた結果、貴かるべき「理」と「情」が、  
言われぬ無念を噛み締めながら、これまでに流した悔し涙の数々を、そ  
れこそ本気で振り返ってみるためにも」とね」

「こわい言葉ですね」

「ここに「畏」と命名された犯しがたい迫力そのものは、先生の「内な  
るシラー」が「外なるゲート」に向けて、沈黙の中に歩み昇るその営み  
の確かさに、当の源を発していると推測されてよいだろう」

「同感です」

「そして、「内なるシラー」が「外なるゲート」に向けて咆哮する獅子  
の姿を、ここでのように、おもむろに先生と重ね合わせるの唐突の誇  
りを免れないなどと語る面々には、あえてこう反論しておきたい。自ら  
の深みに「荒ぶるシラー」を宿さない人間が、そもそも本気で「外なる  
ゲート」など目指すものだろうか、と」

「仰せの通りです」

(五)

「そう言えば、これと関連して思い出されるエピソードがもう一つばか  
りあるのだが、興も乗ったことだ、ついでに披露しておこうか」

「お願いします」

「ある会席の場で、先生の口から、自身を形容して「ゲビルデテ  
(Gebildete)」というドイツ語が、はからずも漏れ出たことがあった。そ  
の眩きを、もつと正確に再現するなら、「わたしという人間は、いわゆる  
ゲレールテ (Gelehrte) よりは、むしろゲビルデテに属している」となる  
だろうか」

「興味ある眩きですね」

「蛇足を承知で訳するなら、前者には、前後のコンテキストを斟酌し  
て、世にいう「博識の人」や「テオリア型の書齋人」が、対して後者に  
は、世にいう「陶冶の人」や「プラクシス型の教養人」が、しかるべき  
和訳として振り当てられるにちがいない。もつとも、ここでの「ゲビル  
デテ (陶冶の人)」は、言うまでもなく「内なるゲビルデテ」を意味する  
から、この点を強調していつそう正確を期すなら、その中身は、つま  
るところ「外なるゲレールテ+内なるゲビルデテ」という形にまとめられ  
るだろうけれども」

「なるほど」

「なお、広く人口に膾炙した言い回しをもじるなら、外も内もゲレー  
ルテ一色に染められた「博識の人」が、まさに「文は文なり」に象徴され  
るとすれば、内なるゲビルデテを外なるゲレールテで包んだ「陶冶の人」  
は、文句なく「文は人なり」に象徴されるにちがいない」

「ええ」

「こうした後者を、いささか表現を換えて「ゲートを目指すシラー」と

形容するなら、対して前者は、その迫力不足を強調して「当のシラーを欠いた似非ゲーテ」と形容されてよいのかもしれない」

「手厳しいですね」

「およそこのように、先生ご自身は、あるいはグッテレールテ（博識の人）ならぬグッベルデテ（陶治の人）として、あるいは「文は人なり」の典型として、あるいは外なるゲーテを目ざす内なるシラーとして、それぞれの確に形容できるのだが、改めて、当人に具った巨人的な迫力に思いを致すなら、なぜか、念頭を掠めて離れない摩訶不思議なイメージがある。想像できるかね」

「とうてい無理です」

「驚いたことに、太古の昔からピラミッドの傍らにひたすら座す、あの沈黙のスフィンクス像なのだが、エジプトの古い伝承に従うなら、この像は、すべてが眠りに落ちた夜更け、中天に輝く満月に向けて、声なき咆哮を發すると伝えられている」

「思い出しました。日本画家・杉山寧の美術全集で、三島由紀夫が、義父の杉山を「声なく咆哮するスフィンクス」に準えていましたね。あれには、胸の詰まるものがありました」

「わたしの場合もそうなのだが、先生もまた、すべてが眠りに落ちた静

寂の中で、ただ独り、須磨の海に煌々と浮かぶ満月に向けて、あるいは、信州の深志の里を照らす中天の月に向けて、人知れず、内なるシラーの封印を解いて、あのスフィンクスに負けない沈黙の咆哮を發しておられるのではないだろうか」

「ええ、その咆哮はおそらく、いかなる遠方にあっても、およそ聴く力を具えた人間の耳には、無視できない確かな響きで、おのれの存在を自証しているにちがいありません」

「ともあれ以上、先生の「人と思想」をかなり独断的に紹介してきたが、改めて振り返ると、あえて「人と思想の紹介」と称するには、あまりに「人の面」にウエイトが掛かり過ぎていたようだ。当然ながら、いささか「文の面」が疎かになっていないか、との謗りを受けるだろうが、これにはしかし、こう答弁しておこう。先生という人物ほど、世にいう「文は人なり」の形容が当てはまる人間はいないのだから、先生における「人の面」をなるべくクリアに浮かび上がらせるのは、まさにそのまま、「文の面」でのメッセージを浮かび上がらせる間接の営みに異ならない、とね」

「双方はあくまでも、同じ一つの全体であるのですから」

（本学文学部教授）